

黒田龍之介著「ぼくたちの英語」三修社、2009年11月20日刊を読む

1. 「音読は英語教師の基本」

- (1) 歌に限らない。英語教師は時には声を出して、英語を確認する必要があるのではないか。
- (2) 「音読なしで英語を勉強することは考えられません」

2. <その理由>

- (1) 「目で追うだけよりも頭に入る」

- ①自ら音を発し、それを自分の耳でとらえ直すことが、記憶の定着を促す。
- ②また、正しく発音し分けている二つの単語は、区別して記憶できるけれど、いい加減だと混同してしまう。
- ③正直なものだ。

- (2) 「いざ英語を使うことになったときの準備」

- ①英語を話す必要はいつ訪れるかわからない。普段から準備を怠らない。
- ②英語教師は、授業中必ず発音しなければならないはずで、その時、発音が悪いようでは、どうにもカッコ悪い。
- ③ふだんからよい発音を心がけたい。

- (3) 「文の構造が理解できているかを確認できる」

- ①これは、生徒に読ませてみれば、一目瞭然である。
- ②理解できていないまま音読している生徒は、とんでもないところで文を切る。
- ③whatが疑問詞なのか、それとも関係詞なのか、イントネーションで解釈がわかるのだ。

- (4) 「声を出すことが楽しい」

- ①声を出すことは快感でもあるのだ。
- ②「英語教師になって、率先して発音しなければならない立場になってしまったので、これをきっかけに、教科書をはじめ、英文を声に出して読むよう心がけています」(新人の英語教師)。
- ③「それはとてもいいことだよ。まずは、授業の予習でもいいから、少しずつ練習していってほしい。マザーゲースの早口言葉は、おすすめ」(黒田先生の教え)。

- (5) 「予習よりも復習を」

- ①人間は、忘れるものである。
- ②それを食い止めるには、繰り返すしかない。
- ③だから、時間の許す限り、(授業中)繰り返してあげよう。

3. <教師の一言は影響が大きい>

- (1) 中学生や高校生というものは、非常に扱いにくいようでいて、妙に素直だったりもする。
- ①たとえば、進路を決めるとき、教師のアドバイスが、大きな影響を与えることがある。

②だから、教師は発言に気を付けなければならない。

③たとえば、「〇〇語は、これから重要になる。勉強しておいた方がいい」といったような話を、授業中、教師が何となく話す。それほどの深い意味はないかもしれないが、この意見がある生徒には深く印象付けられ、結局その言語を大学で専攻する学生が現れたりする。こういうことは珍しくない。

(2)教師自身はそのつもりはなくとも、多感な生徒には、大きな影響を与える可能性が常にあるのだ。だからこそ、不用意な発言は、控えてもらいたい。

(3)特に困るのは、自分の偏見で否定的なことを発言する教師である。

①ある生徒が大学でドイツ語を勉強しようと考えた。

②ところがそれを聞いた高校の教師が、「ドイツ語なんて、森鷗外の時代じゃあるまいし」と発言。この生徒は大きなショックを受け、専攻を変えようとまで悩んだ。

①でも別の教師がこういった。「あなたがドイツ語をやらなくてだれがやるの？」。結局この生徒は、初志貫徹でドイツ語を選択した。

＜コメント＞

英語の先生も、「英語の発音練習・暗唱、書き取り練習」を。

＜さらには＞、

「きれいな英語の発音練習」「美しい筆記体、ブロック体の練習」「発音記号を書く練習」「発音記号をわかりやすく教える練習」を。

数学の先生は、「美しい数字、数式、美しい図形を書く練習」を。

国語の先生は、「朗読の練習」「美しい楷書の練習」を。

スポーツ選手は、試合前の、準備体操を欠かさないように。

先生方も少しづつでいいですから、毎日、授業前には、「発声練習」と「一人模擬授業」を。

2026年1月14日(水)